

「底が突き抜けた」時代の歩き方 535

男同士の濃密な関係を描いた映画『ブローックバック・マウンテン』

映画『ブローックバック・マウンテン』は05年度ヴェネツィア国際映画祭グランプリ受賞を始め、06年度ゴールデングローブ賞主要部門（作品賞・監督賞・脚本賞・主題歌賞）で受賞し、06年度アカデミー賞の最多主要8部門にノミネートされるほどの話題と評判を呼んだ。オスカーを取るかどうかについて映画関係者や映画ファンが注視していたのは、米国各地で「カウボーイをゲイに描くとはけしからん！」と、上映禁止運動が起こっていたからだ。北西部ワシントン州や南東部テネシー州などで、現に劇場が自主的に上映を取りやめたケースが続出しているために、アカデミー会員が国内の保守派を敵に回してまで、この映画を推挙するかどうかを見守っていたのである。

結果は作品賞に『クラッシュ』が選ばれる番狂わせだった。世界各地の映画賞でずっと『ブローックバック・マウンテン』に惨敗してきた『クラッシュ』の監督ポール・ハギス自身も驚くほどであった。オ・クランド在住の映画評論家町山智浩は『アエラ』(06.3.27)で、「作品賞を逃した理由」について記している。

《映画は、アメリカ人の男らしさの象徴であるカウボーイ同士の悲恋というタブーに挑戦した。実際、ワイオミングでは98年に一人の学生がゲイだというだけで牧場でリンチされて殺されている。

公開されると予想通り、猛反発が始まった。キリスト教保守派のテレビ伝道師パット・ロバートソンは「モラルの公害だ」と断罪した。しかし映画は、キリスト教保守派が強く、ブッシュ大統領を再選した西部や南部でもヒットした。

ロバートソン師に強く影響され、ゲイ同士の結婚を法律で禁止しようとしているブッシュ大統領は、1月23日に中西部のカンザス州立大学で講演した。質疑応答の時、学生の一人が「大統領は『ブローックバック・マウンテン』をどう思いますか」と質問した。

大統領が「観てないから何も言えない」と答えると、学生は「観てください！ 大統領もきっと好きになります」と薦めた。実はこの数日前、ホワイトハウスは『ブローックバック〜』のビデオを映画会社にリクエストしたのだが。

映画の主人公二人は密会のために、「釣りに行く」と妻を偽る。だが、妻は感付いて「本当は釣りじゃないでしょ！」と問い詰める。2月11日、チェイニー副大統領がウズラ狩りで旧友を過って散弾銃で撃った時、テレビのトークショーは「本当はウズラ狩りじゃないでしょ！」とからかった。「ニュー Yorker」誌は『ブローックバック・マウンテン』のポスターの二人をブッシュとチェイニーに描き替えた表紙で、親密すぎるパ

ートナーシップをおちょくった。》

『ブローックバック〜』が、『単なる映画を超えた社会現象にすらなってい』る光景も次のように取り上げられている。

《アカデミー賞の直前、非営利団体「地球言語モニター（GLM）」は、今年のハリウッド流行語大賞は「ブローックバック」だと発表した。単なる山の名前が男同士の恋愛を意味する単語となり、ネット上には「スター・ウォーズ」や「トップガン」など人気作品を勝手にゲイのラブストーリーに再編集した「ブローックバック」ごっこがあふれた（たとえば『ブローックバック・トゥ・ザ・フューチャー』！）

アカデミー賞では、8部門にノミネートされた。授賞式では『シェーン』をはじめ名作西部劇をゲイっぽく編集したクリップが上映され、すべては『ブローックバック〜』のためにあるように見えた。だが、受賞したのは監督賞ほか3部門のみ。作品賞は逃した。

ゲイの聖地であるサンフランシスコの地元紙「クロニクル」によると、本物のゲイのカウボーイで、カリフォルニア州のゲイ・ロデオ委員会（つまり本物のゲイ・カウボーイ）の会長ブラッド・ブルーナーは、作品賞を逃したのは「まさに恐怖だ」と語ったという。「この国のホモセクシュアル恐怖症がよくわかったよ」

『ブローックバック〜』で脚色賞を受賞したラリー・マクマートリーは授賞式の後、こう語った。

「アメリカ人はカウボーイをゲイにされるのがよっぽど嫌なんだ」

『キネマ旬報』（06年3月下旬号）には、「アメリカでの反響」（文＝荻原順子）が掲載されている。

《アメリカの評論家たちから絶賛され、映画賞を総なめに行っている「ブローックバック・マウンテン」は、製作費の5倍以上の7200万ドルを稼ぐという大ヒットとなったが、その興行収入を全米地域別に観ると、ニューヨークやボストン等、知識階級が多く住む都市を含む東部と、サンフランシスコ、ロサンゼルス等、リベラルな考えを持つ人間が多いカリフォルニアを含む西部の2地域だけで55%を占めるという偏りようである。「ブローックバック〜」の舞台となる2州、ワイオミング州の在るロッキー山脈地帯はわずか3%、テキサス州の在る南中部も8%に過ぎない。

もっとも、ワイオミング州内の映画館で「ブローックバック〜」を上映しているのは州都シャイアンに在る1館だけ。しかも一般公開から1カ月以上遅れた1月20日にやっと公開された。地元民の中には、公開を待ちきれずに隣のコロラドまで観に行った人達も居たし、シャイアンでの公開も概ね歓迎されているようだ。もちろん本作の公開を苦々しく思っているワイオミング州民も居る。元カウボーイだという男性は、「他所者がやって来て間違ったイメージをこの土地に植えつけていった映画だ。死んだカウボーイ達の魂も浮かばれないよ、」という苛立ちのコメントを残している。

テキサス州でも賛否両論あるらしく、映画データベース・サイトIMDBには、テキ

サスの映画ファン達から「ブローックバック～」を熱く支持するコメントが寄せられてきている一方で、ジェイク・ギレンホール演じるジャックが家庭を持つ町に設定されているテキサス州チャイルドレスでは、映画館の経営者が、“教会の力が強い小さなコミュニティのこの町で（キリスト教の教義に反するゲイの恋愛を描く本作を）公開して騒ぎにでもなったら大変、”と尻込み。オスカー候補にもなった同作公開の見通しは立っていない。》

『ブローックバック・マウンテン』は、カウボーイ同士の「許されざる愛」を描いた映画なのだろうか。“ゲイカウボーイ映画、”なのだろうか。確かにカウボーイの性交場面も描かれているが、そのことをもって男くさい筈のカウボーイ同士の禁断の同性愛を描いた映画とみなすには、あまりにもみえなくなっていくものが多すぎるように思われる。

“ゲイカウボーイ映画、”として成り立つ部分よりも、“ゲイカウボーイ映画、”の部分を除いて成り立つ面のほうが大きいのではないだろうか。少なくとも私は“ゲイカウボーイ映画、”とはみななかった。というより、性交場面があるが故にゲイ映画とみなされるのであれば、ゲイ映画として取り扱われないために性交場面は描写されないほうがよかったと思うほどである。この映画が性交描写を抜きにして成り立つかどうかはわからないが、性交描写が不可欠だからといって、その点にむかってこの映画の主題を絞り込んでいくことにはどうしても割り切れなさを感じてしまう。映画のストーリーはこうである。

アメリカがベトナム戦争の泥沼にのめり込んでいった63年。ニューヨークからもロサンゼルスからも遠く、時が停まったような北部ワイオミング州のブローックバック・マウンテンの農牧場に、イニス・デルマーとジャック・ツイストの二人が夏だけ羊を追う季節労働者として雇われる。共に20歳の二人は一人一人住まない山奥に入っていく。寡黙で堅実派のイニスと、天衣無縫で夢見がちなジャックは好対照だが、壮大で美しいブローックバック・マウンテンの大自然の中で仕事をしているうちに次第に意気投合し、二人の間には友情を超えた、自分たちも意識しない深い感情が芽生えはじめる。ある寒い夜、狭いテントで二人並んで寝ていたとき、全くの成り行きで二人は自然なかたちで性行為を始める。自分たちがホモセクシャルだと認知していない彼らは、とまどいと気まぐれ嫌悪感に駆られながらも、熱く燃え上がる二人の情熱は抑えられない。

彼らは自分たちの行為のもつ意味がわからぬまま、その後もキャンプが終わるまで関係を続ける。二人の仕事ぶりを双眼鏡で監視していた牧場主は彼らの関係に気づいて、予定より早く下山させ、労働の契約を終了する。再会の約束を告げぬまま、二人はまるで何事もなかったかのような面持ちで別れていく。しかし、ジャックが自分の前から立ち去り、視界から消えたとき、感情を表に出さず無表情で口数の少なかったイニスは、自分の気持が抑えきれなくなって、建物の物陰に隠れて人知れず泣きくずれる。帰郷するとイニスはすぐに許嫁のアルマ（ミシェル・ウィリアムズ）と結婚し、二人の娘も生まれ、幸せな家庭を築いていく、定職に就かず、テキサスで日銭稼ぎのロデオ生活を送っていたジャックは、地元の大手農耕機材販売会社を経営する大金持ちの父を持つロデオ

・クイーンのラリー(アン・ハサウェイ)と知り合って結婚し、やがて息子も生まれる。

4年後の67年、放牧業を営んでいるイニスのもとにテキサスのジャックから、ブローックバック・マウンテンの写真が印刷された絵葉書が届く。そこには近日中にイニスを訪ねると書かれてあった。思いがけなさにイニスの胸は高鳴り、ポストカードを持つ手は震えている。夫の興奮ぶりを感じ取った妻アルマが尋ねると、イニスは古い釣り友達がテキサスから訪ねてくただけと説明する。ジャックがイニスのアパートにやって来たとき、窓から表に車が止まったのを見るなり、イニスは勢いよく玄関を飛び出す。再会を喜ぶ二人は熱い抱擁を交わすが、衝動を抑えきれないイニスはジャックを物陰に引っ張り込み、荒々しくキスを浴びせる。そんな二人の行動を窓から偶然、目撃したアルマは大きな衝撃を受ける。4年ぶりにジャックに再会できたことで興奮ぎみのイニスには、妻の動揺が目に入らない。二人が酒場に出かけると言って家を出て行った後、一人部屋に残されたアルマは娘を抱きしめて、ひたすら涙を流しつづける。

イニスとジャックは酒場ではなく、モータルのベッドの上でお互いがどれだけ求めあっていたかを確認し合うように、激しく愛しあう。そして遠く離れていたこの4年間の想いをお互いに告白する。翌日、二人は人気のない山の麓の川辺に行き、将来について話し合っていた。互いの想いとは裏腹に、現実的には二人とも子供にも恵まれた結婚生活で身動きが取れないことを痛感する。それでもジャックはイニスと二人でどこかで牧場を営み、一緒に暮らすことを本気で願っている。その誘いにイニスは年に数回、数日間だけ、釣りが狩猟旅行に出かけるという口実で会うことしか叶わないと呟く。誰にも知られないように二人の関係をこれからも続けるのなら、それが精一杯だと話す。イニスは彼自身畏れている決定的な理由について静かに語りはじめた。それは、イニスがブローックバック・マウンテンでジャックと初めて抱き合った朝、一匹の羊が天罰のように狼に喰い殺されているのを見て、そこに覆い被さってくる光景でもあった。

イニスが9歳のとき、一人の男が無惨な姿で殺されている衝撃的な光景を目撃する。彼が住む村に一組の男同士のカップルが世間体など気にせず、気丈に牧場を切り盛りしていたが、一人はリンチの末に殺され、もう一人の男も殺されている死体を彼は目撃したのだ。その男を殺したのはイニスの父親だった。この記憶がずっとイニスの心に深く刻まれており、ジャックと自分の関係もこのカップルの男たちのような運命を辿ることを畏れていたのだ。三年後の70年、ジャックと逢引きするたびに仕事を休んでいたイニスは、やがて仕事を失い、家計の負担が全部アルマに被さったために、ジャックとの関係も積み重なってイニスとアルマの夫婦生活は冷め始め、娘たちのためだけにかろうじて関係が保持されている状態だった。夫の心がもはや自分にはないことを知るアルマは、勤務先のスーパーマーケットの上司と心を通わせていた。

ジャックとラリーの夫婦関係も身分の違いからしだいに歯車が噛み合わなくなっており、義父の経営する農耕機材販売会社に妻と共に勤務するジャックの息抜きは、数カ

月ごとに車を飛ばしてワイオミングまでイニスに逢いに行くことだけだった。互いの家庭が少しずつ崩壊する中でも年に数回の逢瀬は続いており、それは二人にとって生き甲斐にまで高まっていた。「妻と別れる。君も別れる。この山を買う金ならある。二人で暮らそう」と誘うジャックに、イニスは「家庭を壊したくない」と応じず、「いつも俺が君を迎えに来るばかりだ。君はなぜテキサスに来ない？」とジャックがなじるのが常だったが、離婚したのはイニスの方だった。75年、勤務先の上司と再婚したアルマが二人の娘を引き取り、イニスはひとり暮らしを始めることになる。

イニスの離婚を知ったジャックはついに一緒に生活できると思い込み、気持を弾ませながらワイオミングに車を飛ばす。しかし、イニスは離婚したからといって一緒になるのは到底無理だと拒絶したため、ジャックはショックで打ちひしがれる。結局、二人の関係に進展がないどころか、これまでの逢引き回数すらイニスの生活苦のために減らさざるをえなくなってしまう。イニスは酒場で出会ったウェイトレスの若い女性と付き合い始め、娘を食事の席で引き合わせる。彼が席を外した際に彼女は娘に自分が父親の再婚相手に相応しいかどうか尋ねるが、娘は父親は複雑な人だからどっちとも言えないとお茶を濁す。その言葉通り、後日イニスは彼女の前から突然姿を消す。イニスとジャックが37歳になった80年、二人は年に数回、ワイオミングの山々でキャンプして過ごし、20歳で出逢ったときと変わらぬ無邪気さと情熱で愛しあうが、そのあといつも胸が締め付けられるようなキリキリする別れの悲しさにどっと襲われていた。

翌年の春の逢瀬の朝、二人がそれぞれの生活に戻るようになっていたとき、イニスは次は11月だと告げる。どうして夏に逢えないのか、とジャックは詰め寄る。イニスは、もう若い頃のように仕事を軽んじるわけにはいかない、二人の娘の養育費が自分の肩に重くのしかかっていることを理解してほしいと答える。愛し合っている二人に現実の重さがじわじわと押し掛かってきて、人知れず年に数回だけ逢うことで続けてきた20年にも及ぶ関係は、行き場のない暗礁に乗り上げつつあった。「僕たちにはブローックバック・マウンテンの思い出しかないじゃないか」とジャックが叫ぶと、イニスも「お前のせいで俺はこんな人間になってしまった。どうか俺を楽にしてくれ！」と感情を昂ぶらせて、「いつも誰かに見られているような気がする。誰かに非難されているような気がする」と不安を打ち明ける。激しく殴り合った後、二人に別れの時がやって来る。ジャックは去って行くイニスの後ろ姿に、63年の夏の彼の姿を重ねて回想していた。

あの朝、立ったまま居眠りをしていた自分の背後から腕を伸ばして抱き寄せ、耳元に歌を歌ってくれたイニスの姿が浮かび上がり、先のことなど考えることなく情熱的に激しく愛し合った20歳の二人の記憶が思い起こされて、ひとり取り残されたジャックの目は遠くを見つめる。寂しさを紛らわせようとしてジャックはその後、メキシコへ足を伸ばして男娼を買ったり、お互いの妻がいない間に妻の友人の夫である牧場主任と意味深長な視線を交わし合ったりする。イニスとの間に失われつつある濃密な関係を新たに

求めようとしてさ迷っていたのだ。ジャックが「再婚相手はいないのか？」とイニスに訊くと、「地元の女といい関係にある。どうなるか……」と彼は応え、ジャックも「少し前から牧場主任の女房とデキてる」と語る場面があり、二人の痛切な関係が最も危うくなるところで今野雄二が指摘するように反語的な話法が援用され、《ジャックの浮気を責めるイニスと、イニスのカミングアウトできない臆病さをなじるジャックとが、お互いに気まずい、苦い後味を残したまま、別れを告げ》る姿がそこに象徴されていた。

その翌82年、晴天の霹靂^{へきれき}ともいうべき事態が起こる。イニスがジャックに宛てた葉書が、「死亡」のスタンプを押されて返送されてきたのだ。驚愕したイニスが妻のラリーに電話すると、彼女は冷静にまるで他人事のように、ジャックが車の修理中に突然破裂したタイヤの反動で地面に叩きつけられて失神し、飛散した破片で傷を負い、出血多量で死んだと告げる。ショックで言葉も出なかったイニスは直感的に、ジャックはゲイバッシングのリンチによって殺されたのだと悟る。「ジャックは自分の遺灰はブロークバック・マウンテンにまいて欲しいと言っていたわ。遺灰は彼の実家に保管されている。そう、それからブロークバック・マウンテンは、ジャックにとって特別で一番のお気に入りの場所だった……」と、ラリーの声はイニスの動揺を打ち消すように続く。微かに泣いているかのようにも聞こえる彼女の声は、受話器を置く音と共に聞こえなくなる。

イニスは傷心のまま、ジャックの生家を訪ねる。荒れた牧場の真ん中に建つあばら家の玄関には、悲しみを湛えたジャックの老母が待ち受けており、言葉もなく彼女に招き入れられると、家の中にいたジャックの父親がイニスに「家族の墓には向かん奴だった」と語りかけてくる。そして無表情に「ジャックはいつも言っていた。いつか親友のイニスを連れて、必ずこの家に帰ってくる。そして二人でこの牧場を立て直すんだ」と付け加える。かつてジャックが子供の頃から使っていた、小さな勉強机と年季の入ったベッドだけが置かれた質素な部屋にイニスは足を踏み入れる。クローゼットを開けると、中にはブロークバック・マウンテンでジャックが着ていたデニムのシャツが掛かっていた。それに触れると、そのシャツの下に重なるように自分のダンガリーシャツが掛けられているのを思いがけなく発見する。失くしたと思い込んでいた自分のシャツが、こんなところにあったのだ。

イニスは二枚のシャツを手にとって、ジャックの匂いやブロークバック・マウンテンの香りを嗅ぐように顔を寄せる。帰り際、ジャックの父親は「遺灰は家族の墓に埋葬するよ」と呟き、母親はまた必ず会いに来てほしいと懇願する。トレーラーハウスに住むイニスのもとに、19歳になった娘が訪ねて来て、結婚を報告し、式への出席を促す。イニスは仕事を理由に娘の願いを一旦は拒否するが、考え直し、式への出席を約束する。喜ぶ娘を送り出した彼は部屋に娘の上着が置き忘れられているのに気づき、その上着に染み付いた娘の残り香を嗅ぎ、クローゼットに直す。そこにはダンガリーシャツとデニムの青いシャツと一緒に掛かっており、扉の横にはジャックが初めてイニスに送ってき

た、ブローックバック・マウンテンの絵葉書がピンで留められている。それらを慈しむように手で撫でながら、イニスは……Jack, I swear、ジャック、僕は誓うよ……と呟く。

監督のアン・リーは映画パンフ収録のインタビュー（田畑裕美）のなかで、97年に発表され、翌年に単行本化されたアニー・ブルー（註 - 「湾岸（ SHIPPING ）ニュース」でピューリッツァー賞を受賞）の短編小説「ブローックバック・マウンテン」を読んで、「深い感動を覚えて、読み終わったとき涙を流していました」と振り返り、インタビューアーの記述を通して、次のように語る。《「ブローック（破損）バック（背）」という山の名前はどこか暗示的だ。ここで羊番をする2人が初めて結ばれた翌朝、彼らは1匹の羊が狼に殺されているのを発見する。原作にはない、やはり暗示的なシーンだ。

「ブローックバック・マウンテンとは、2人にとっての“樂園”であり、20年かけてそこに戻ろうとしますが、到達できない。2人にはあそこで何が起きたのか理解できないのですが、1人が死んで初めて真実の愛に気づく。原作で私が最も惹かれたのはその点です。このラヴストーリーの部分に胸をかきむしられるような思いがしたのです。これは男同士の、ゲイの、という枠組みを超えて、何よりも普遍的なラヴストーリーです。純粋な愛、そして、愛の幻想を描いた物語なのです」

冒頭に掲げた引用のように、ブローックバックという山で“世界は自分たちのもので、間違ったことは何一つないように思えた日々”を過ごした若者2人は、その輝きを生涯、追い求めることになる。自分たちにも理解できないパッションに突き動かされ、初めて味わった禁断の果実。その代償には、もうひとつのパッション（受難）が待ち受けていた……。この物語は、ワイルドな西部の男2人の関係をとおして描かれる、現代の「失樂園」なのかもしれない。

「ブローックバックは架空の場所」と著者アニー・ブルーは明かす。ワイオミングの地図にも載っていない。だが主人公2人にとって、そこは確かに実在した。それは観客の心にもいつしか刻まれ、愛の幻影としていつまでも残るだろう。

「原作は簡潔ながら壮大で、一種、神話的でもあります。そのエッセンスを保ちながら、どう映画的にアレンジするかが難しかった」と語るアン・リーだが、彼にとってこの作品がひとつの金字塔となったことは疑いない。》

主人公のイニス・デルマーを演じたヒース・レジャーは同パンフ集録のインタビュー（立田敦子）のなかで、「『ブローックバック・マウンテン』の素晴らしさは、嵐のようなふたりの愛が、美しく穏やかな大自然の風景の中に溶け込んでいることです。実際は、カナダで撮影されたそうですが、ふたりが密会を重ねるブローックバック・マウンテンは、社会の偏見からふたりを開放してくれる文字通り、オアシスのように見えますね」という質問に、「本当にとても美しく静寂な場所だったよ。実際、あの環境のおかげで僕は、イニスを演じることができたと思っているんだ。人間は、環境によって成り立ちが変わる。イニスというキャラクターは、あの雄大な風景の静寂さ、沈黙を反映しているとい

える。僕は、イニスをあの風景の中に溶け込ませたかった。まるであの岩や土、山の一部として存在しているように。イニスの基盤は、まさにあの土地なんだ」と答えている。

ジャック・ツイスト役のジェイク・ギレンホールも「アン・リー監督は、この物語を、ゲイの恋愛劇ではなく、障害によって阻まれ、愛を失うことについてのラヴストーリーだと考えているとっていました。男性同士と男女間のラヴストーリーに違いはあると思いますか？」と訊かれて、「いまはないと思えるよ」と返答し、この映画は「男と女が出会って、恋に落ち、失恋し、また別の人に出会う……」といった「お決まりみたいなもの」の「恋愛映画に馴れてしまった人たちにとっても、恋愛についての考え方を見直すきっかけを考えていると思う」と述べて、こう続ける。

「これは、ふたりの人間がお互いを愛し続けることの難しさについての物語なんだ。ストレートでもゲイでも関係ないと思うよ。」

「この物語のすごいところは、最初から自覚している同性愛者としてこのふたりを描いていないところなんだ。ふたりのストレートの男がいて、一緒にいるうちに気が合うようになって、いろいろなことを考えるようになる、僕は、この男に惹かれている、僕はゲイなのか、と。つまり、僕は、ストレートの男が男性を愛したときの不安定感を演じていたんだよ。僕は、ジャックと妻のラリーンの間にも確固とした愛が存在したと思うんだ。それはセクシャルなものとはちょっと違うだけなんだ」

この映画の脚本家かつプロデューサーであるダイアナ・オサナは「ブローックバック・マウンテン」について、映画パンフの中で次のような発言をいくつか行っている。

「イニスがアルマに出逢ったとき、もちろん彼は彼女に魅かれたでしょう。“結婚して子供を作る、それこそが自分のやるべきことだ。”イニスはアルマを愛してはいるけれど、それは情熱とは違う。ジャックに対して感じている愛にはまったく及ばない。貧しい家庭で生まれ育ったアルマは、ささやかで平凡な幸せを願っている女の子。イニスとジャックはお互いの感情を理解し、明白にできる状況ではない。アルマもまた、二人の男の関係をしっかりと把握できていない」

「ブローックバック・マウンテンはイニスとジャックにとって、まさに“魔法の場所”ね。そこは二人が恋におちた場所であり、しかし彼らは再びそこへ戻ることはないの。なぜなら、意識するしないに関わらず、そこは二人の聖域であり、決して思い出を壊したくないと感じていたから。ジャックの台詞にあるように、“僕たちにあるのは、ただブローックバック・マウンテンだけ。”(アン・リー監督も、「ドラマの核は、ブローックバック・マウンテンを見つけることでした。それは掴みどころがなく、かつロマンティックです。ずっとそこに戻りたいと感じているけれど、決して戻ることはありません。イニスとジャックにとってそれが彼らの愛のかたちでした」と言葉を重ねている。)

「イニスとジャックは、とても貧しい田舎の少年たちなの。厳しい生活環境に育ったせいで、二人は経済的だけではなく、雪や風、雨に晒された厳しい土地で、体力的にも生

き延びることだけ考えている。ブローックバック・マウンテンは、現実社会からも現実生活からもかけ離れていて、そこには邪魔なものは何もなく、プライベートで心地よく安心した気持ちになれる。そして彼らは、お互いを賞賛しあうの。」

「ジャックは、イニスが初めて心を通わせることができる人間だった。彼らの関係は感情で始まり、そして肉体へと移った。こんなに激しい関係を、イニスは今までの若い人生において経験したことがなかった」

映画『ブローックバック・マウンテン』を単なる“ゲイカウボーイ映画”、たらしめていないのは、映画のタイトルにもなっているように、イニスとジャックの濃密な関係がブローックバック・マウンテンという場所でのみ可能であったことが描かれていたからである。ブローックバック・マウンテンでこそ、彼らの濃密な関係が成立したということが、この映画を“ゲイカウボーイ映画”から逸脱させているのだ。アン・リー監督は、「ブローックバック・マウンテンとは、2人にとっての“楽園”であり、20年かけてそこに戻ろうとしますが、到達できない。2人にはあそこで何が起きたのか理解できないのですが、1人が死んで初めて真実の愛に気づく」と語り、「原作は簡潔ながら壮大で、一種、神話的でもあります」とも云う。イニス役のヒース・レジャーも、「人間は、環境によって成り立ちが変わる。イニスというキャラクターは、あの雄大な風景の静寂さ、沈黙を反映しているといえる。僕は、イニスをあの風景の中に溶け込ませたかった。まるであの岩や土、山の一部として存在しているように」と強調する。

脚本家兼プロデューサーのダイアナ・オサナは、「ブローックバック・マウンテンはイニスとジャックにとって、まさに“魔法の場所”、ね。そこは二人が恋におちた場所であり、しかし彼らは再びそこへ戻ることはないの。なぜなら、意識するしないに関わらず、そこは二人の聖域であり、決して思い出を壊したくないと感じていたから。ジャックの台詞にあるように、“僕たちにあるのは、ただブローックバック・マウンテンだけ。”と説明する。

「ブローックバック・マウンテン」が二人にとっての“楽園”であり、“魔法の場所”でありえたのは、ダイアナ・オサナが言うように、「現実社会からも現実生活からもかけ離れ」た、要するに、「そこには邪魔なものは何もなく、プライベートで心地よく安心した気持ちになれる」、お互いに自分を剥き出し合うことで濃密な関係を育むことのできた場所であったからだ。アン・リー監督が「一種、神話的でもある」と語るのは、「現実社会からも現実生活からもかけ離れてい」という点だけでなく、「男同士の、ゲイの、という枠組みを超えて、何よりも普遍的なラブストーリー」に踏み入っているからである。ヒース・レジャーが「イニスをあの風景のなかに溶け込ませたかった。まるであの岩や土、山の一部として存在しているように」と振り返るのも、「ブローックバック・マウンテン」の風景の中に溶け込んで振る舞えば、自然にジャックとの間でああなってしまったということであり、その風景の中に溶け込んだ振る舞いそのものが「神

話的」であったのだ。

この映画はブローックバック・マウンテンという場所でかつて味わった関係の濃密さが忘れられず、その場所を離れてからも追い求めれば追い求めるほど、その濃密さが得られなくなる「存在の寂しさ」を描いていたと思われる。この映画を“ゲイカウボーイ映画”として観ることの異和感を募らせるのは、まさにその点にあると言える。ジャック役のジェイク・ギレンホルムの、「この物語のすごいところは、最初から自覚している同性愛者としてこのふたりを描いていないところなんだ。ふたりのストレートの男がいて、一緒にいるうちに気が合うようになって、いろいろなことを考えるようになる」という言いかたは、この作品の核心を衝いている。二人は本当に同性愛者なのか。彼らに限らず、誰でも「ブローックバック・マウンテン」のような場所で二人きりの生活を営むようになれば、濃密な関係になって同性愛者みたいになってしまうのではないか。つまり、離れがたくなるのではないか。このように考えることは、男女の濃密な関係と男同士の濃密な関係の差異を無化し、濃密な関係のなかでは男同士でも女同士でも男女関係のようになることがありうるということではないのだろうか。

映画評論家の今野雄二が映画パンフ集録の映画評で、《その事が起こった翌日、彼らは後ろめたさを断ち切るように、こんな会話を交わす》と冒頭に記して、「あれは1回限りのことだ」(イニス)「俺たちだけの秘密だ」(ジャック)「俺はオカマじゃない」(イニス)「俺も違う」(ジャック)という印象的な会話を取り出した後、《しかし、その夜イニスとジャックは狭いテントの中で、どちらからともなく抱き合い、キスをする。/それからの日々……ブローックバック・マウンテンはこの二人の若者たちにとって秘密の楽園、理想郷ともいべき聖域となる》と書いている。この二人の会話は自分たちの身に起こった行為に驚きと同時に罪深さの念をあらわしており、言葉どおりに自分たちが「オカマ」であることを否定しようとする気持ちをいいあらわしているわけではない。もし二人が「オカマ」であることを否定する気持ちを強めていれば、その夜再び抱き合うことはなかったにちがいない。

自分たちは「オカマじゃない」と強く否定しながらも抱き合うことになるのは、自分たちの抱き合う行為はブローックバック・マウンテンの大自然のなかでの濃密な関係における自然な成り行きとして受けとめられていたからだ。《大自然の懐深く抱かれて、まるで無邪気な子供たちの如く戯れるイニスとジャックが、友情を超えた深い愛情に結ばれていく過程を描いたこの映画》と指摘するように、二人からすれば自分たちの関係は《まるで無邪気な子供たちの如く戯れる》、あっけらかんとしたものにすぎなかったし、いつまでもこうして二人でいたいと願う熱情にほかならなかった。しかし、男女同士であれば全く問題とされなかった、その男同士の関係が外部の視線に晒されれば、ゲイとして社会的に糾弾されてしまうことになるのだ。

最初は二人の濃密さが牧場主に目撃されて、ブローックバック・マウンテンから追い払

われるかたちをとってやってくる。二度目は、4年ぶりに再会した二人がむしゃぶりつくようにキスし、抱擁し合う姿を目撃したイニスの妻から離婚を切りだされて、家庭から追い出されるというかたちをとってやってくる。すべては二人がブローックバック・マウンテンで味わった濃密な関係を忘れられず、追い求めようとするところに原因があった。家を出て落^{らくはく}魄したイニスがジャックにむかって、ブローックバック・マウンテンであんなことがなければ……、お前に出会わなければ……俺はこんなザマにはならなかった、というような自嘲気味の言葉を吐く場面があるが、それは一見後悔しているようにみえるがそうではなく、人並みの結婚生活もうまくいらず、さりとて二人で牧場をやって暮らしていこうというジャックの誘いにも乗り切れないイニス自身の宙ぶらりん状態を自嘲していたのだ。

二人のそれぞれの結婚生活がうまくいかなかったのは、彼らがゲイであったからではない（と思う）。ブローックバック・マウンテンから追い払われた二人が、自分たちは「オカマじゃない」ことを証明してみせるかのように、女性と知り合って結婚し、子供を作るという家庭生活に飽き足りなさを感じていたのは、そこにブローックバック・マウンテンでかつて味わった関係の濃密さが欠けていたからだ。もしかしたら彼らはブローックバック・マウンテンでの濃密さを求めて、家庭生活に入ってしまったのかもしれない。だがそれは得られなかった。結婚生活の破綻に気づいた時点でも、彼らはブローックバック・マウンテンでの濃密さを他に求めつづけようとした。離婚したイニスが地元の若い女性と付き合いはじめるのも、離婚したイニスに“釣り旅行”を断わられたジャックが、男娼を買いにメキシコへ足を伸ばしたり、知り合ったばかりの牧場主任に声をかけるのもすべて、ブローックバック・マウンテンでの同じ濃密さを味わおうとしていたからである。

もちろん、味わえる筈がなかった。ブローックバック・マウンテンを離れて二人がそれぞれに異なる相手との間に、ブローックバック・マウンテンで味わってきた濃密さを味わおうとしても味わえなかった。イニスとジャックの二人にとっても、その濃密さはブローックバック・マウンテンでしか味わうことができなかったのだ。そのことに気づくのは、おそらくジャックがホモフォビア（ゲイ嫌悪症）の連中のリンチによって殺されてからである。つまり、二人のどちらかがいなくなっはじめて、残された一人がブローックバック・マウンテンで育まれた濃密さは二人のものであったことに気づかざるをえないようになっているのだ。代替不可能な関係の濃密さであった。ジャックの部屋のクローゼットの中にイニスが、ブローックバック・マウンテンで過ごしたときの彼のダンガリーのシャツに、ジャックのデニムのシャツが寄り添うように重ねられているのを見つけて、そのジャックのシャツを顔に当てながら、「ジャック、永遠に一緒だよ」と呟くとき、彼はジャックの死によってブローックバック・マウンテンが永遠に失われたのではなく、逆に永遠に自分たち二人のものになったのを感じ取っていたのである。

2006年4月16日記